

字遊 字感

上質の笑いと人間愛

岡田 安弘

奈良・三条通りの菊岡漢方薬局が「ならまち」に引っ越す前、私の勤め先は真向かいだった。職場の2階から、築百年の薨（いらか）を眺める。岸边に打ち寄せる小波のよう。波頭が朝の光を受けてきらきらと美しい。心が癒された。

創業は元暦元年（1184年）。23代当主の菊岡義政さんは彫刻家でもあった。薬の調合を終えると、アトリエに籠ってしまう。そのころ私は脂肪肝を患っていた。「肝臓に効く薬はありませんか」と相談。お目にかかったのは、その1回きり。転勤後も薬を郵送してもらい、肝臓は正常を取り戻す。

平成19年、88歳の生涯に幕を下ろされた。それを知らず、お礼を言えなかったのが悔やまれる。

詩人でもあった。昭和28年、33歳で詩集「回転木馬」（200部）を出版。父から24代を受け継いだ泰政さん（63）は「蔵を探しても残部はなく、ネット検索で1冊を見つけました。私が生まれて間なしの作品だけに感慨深い」と喜びを語る。

大正から昭和にかけて活躍した日本画家の不染鉄（ふせんてつ）は、23代当主と親交があった。あのたたずまいが好きで、水彩画「三条通りの菊岡家」を描く。ならまちの薬局に飾られている。

彫刻は鹿の木彫りに力作が多い。ホテルフジタ奈良のロビーには、日展出品作が飾られている。

等身大の鹿の彫刻には、直径の大きい材木が二つ必要だ。23代の弟、統政（むねまさ）さんによると、角がある前肢と後ろ半身を別々に彫り腹部で接合。くりぬいた腹部に、母親が春日大社でもらったお守りを必ず納めたそうだ。

昭和28年の第9回日展で入選した「若い鹿」は、昭和天皇が奈良公園を思い出されたのだろう、作品の前ではほほ笑まれる写真が朝日新聞奈良版に掲載される。統政さんが投稿した。

「私が作品を白い布で巻き、上野の美術館へ搬入した。奈良から東京へは直通の夜行急行大和号でした」と懐かしむ。

統政さんは87歳。元英語教師。王寺中学から最後の片桐高まで管理職を嫌い教壇一筋。喜劇王チャールズ・チャップリンの研究者でもある。

天理大英文科に通うころ、奈良市内の尾花座で「ライムライト」を見たのがきっかけだ。「これほど腹から笑い、熱い涙を流したのは初めて」と言う。「独裁者」をはじめ次々に鑑賞し、チャップリン映画の笑いの源泉にたどり着く。

「ただ笑わせるだけではない。弱者を泣かせないための上質な笑い。一貫して流れるのは人間愛。世の権力や不正に立ち向かう勇気を与えてくれた。人間が背負ってしまった悲しさも包んでくれます」。

日本ヘラルド映画社が1977年、「チャップリンと私」をテーマに小論文を募る。統政さんは最優秀賞に選ばれた。同年11月30日、スイス・レマン湖畔のチャップリン邸へ招待される。チャップリン、88歳。体調が芳しくない。面会はかなわなかった。

和紙に毛筆で「祝 米寿」。続けて英語で米寿の意味やチャップリン映画との出会い、家族と奈良の紹介などを記す。和綴（わとじ）にしてウーナ夫人に託す。「人生の最後を静かに迎えようとしていたのかと思うと、泣けて泣けて仕方なかった」と話す。

お礼のクリスマスカードと、その春の誕生日に撮影した写真が届く。スイスの消印は同年12月17日。愛用のステッキを右手に握り、ブルーのセーターが上着の下からのぞく。言いようのない感動に包まれる。

「We I o v e t h e b o o k y o u m a d e」とあり、I o v eにアンダーラインが引いてある。和綴の本を気に入ってくれたのが何よりもうれしい。

数時間後のこと。外電が「チャップリン逝く」と伝える。天国への旅立ちはクリスマスだった。

類につとふ シネマの中の ひとすじの

涙の熱き 思い出のあり

統政さんは歌人でもある。短歌誌「花梨」の同人になって54年になる。

